

第21回東京外語会有志による海外支部歴訪の旅（略称：「旅の会」）
カンボジア支部訪問とアンコールワット／プノンペン旅行
(2025年12月5日～12月9日)

高村忠良（外R1981）

本年度より、初代石原隆良会長（D1956）、二代林義之前会長（F1966）に続き、第三代会長兼事務局長を拝命した。第19回「愛知・三重」から参加した新参者であり、力不足を自覚しつつの初めての主催であったため、募集開始時には不安も多かった。しかし、同じロシア語科ご出身の加藤外語会支部委員長のご協力を得て、ホームページや外語会NEXTイベント等で広報活動を行い、大阪大学咲耶会（旧大阪外国語大学同窓会）のご支援もいただき、ロシア語科同期入学の2名を含む計9名の参加者を得ることができた。当初、旅行会社からは最少催行人員10名との提示があったが、交渉の結果、無事に実施の運びとなった。

12月は乾季に入り、天候にも恵まれた旅となった。もっとも、プノンペンを離れた8日には、カンボジアとタイの国境地域で停戦が破られ、戦闘が再燃したとの報道があり、旅程としては絶妙なタイミングであった。日本との時差は2時間と小さいものの、日本の冬から最低気温25度前後、最高気温30度超のカンボジアに入ると、気温差による負担は少なからず感じられた。

カンボジアでは米ドルが広く流通しており、1ドル未満の釣銭のみカンボジア通貨リエル（1ドル＝約4,000リエル）で返されるため、到着時にリエルへ両替する必要はほとんどなかった。

**12月5日（金）

成田空港 → ハノイ（乗継） → シエムリアップ

9名のうち1名はシエムリアップ合流・プノンペン離団のため、成田空港には8名が集合した。09:30発のベトナム航空便でハノイへ向かい、乗継いでシエムリアップへ向かった。成田・ハノイともに保安検査場は混雑しており、ハノイでは全員が靴を脱いで検査を受ける必要があった。検査を終えると搭乗まで時間が少なく、急ぎ足でゲートへ向かった。いずれの便も気流の乱れは少なく、快適なフライトであった。

シエムリアップ空港出口では「東京外語会『旅の会』様」と記されたボードを掲げたガイドが出迎えてくれた。入国書類で多少手間取った参加者もいたが、全員無事に入国し、バスでホテルへ向かった。シエムリアップの空港は、アンコール遺跡群への影響を避けるため、2023年10月に新空港が開港し、旧空港は閉鎖された。そのため、市街地までは約1時間を要する。

ホテルにチェックイン後、バスでレストランへ移動。広い個室が用意され、ゆったりと食事を楽しむことができた。料理は日本人の口に合うものが多く、量も十分であった。翌日はアンコールワットで日の出を見るため、4時30分ロビー集合とし、早めに就寝した。当地合流の1名からも無事到着の連絡が入った。



到着日の夕食（日本発 8名）



アンコールワットの日の出を待つ



アンコールワットの日の出

**12月6日（土）

アンコール遺跡観光**

前夜合流した1名を加え、9名全員が4時30分にロビー集合し、アンコールワットへ向かった。日の出前の暗闇の中、ガイドが携帯ライトで足元を照らし、参加者も各自のライトを頼りに進んだ。堀を渡り、門を抜け、日の出のビューポイントに腰を下ろし、6時過ぎの朝日を待った。冬至が近いため、太陽は三塔のかなり右側から昇ってきた。朝日に照らされるアンコールワットは荘厳で、旅の始まりにふさわ

しい光景であった。

一旦ホテルに戻り、バラエティ豊かな朝食を楽しんだ後、バスでアンコールトムへ向かった。象のテラス、バイヨン寺院、そしてガジュマル（絞め殺しイチジク）の根が遺跡を覆うタ・プロームなどを見学した。

その後、日本人女性が創業したアンコールクッキー店や地元スーパーで買い物を楽しみ、昼食をとった。ホテルで小休止の後、再びアンコールワットへ向かい、林前会長を除く8名が、急勾配の観光用階段（約50段）を上り第三回廊へ登頂し、記念撮影を行った。夕映えのアンコールワットもまた格別であった。夕食はアップサラダンスショー付きのレストランでバイキングを楽しみ、伝統舞踊を鑑賞した。遺跡見学では15,000歩を超え、朝4時30分から夜21時まで続く長い一日であった。



12月6日昼食時の乾杯

昼食の盛付

ライスが皿に盛られ、各自おかずを取って食べる



ガジュマルが遺跡を侵食



第三回廊登頂 8人衆



アンコールワットの夕景



アpsaraダンスショー



トンレサップ湖



トンレサップ湖クルーズ

ドライバーと脇に座る助手の少年



トンレサップ湖 水上生活舟

**12月7日（日）

トンレサップ湖クルーズ、オールドマーケット、
シェムリアップ → プノンペン、カンボジア支部との交歓会**

朝食後ホテルをチェックアウトし、トンレサップ湖クルーズへ向かった。専用船には船長と小学生ほどの助手が乗り込み、助手は乗客に肩もみサービスをしてチップを集めていた。湖上には、水とともに暮らす人々の「浮かぶ村」が点在し、家屋、学校、商店までもが湖面に浮かんでいる。雨季の名残で水量は豊富で、湖上に寺院の門が見えたが、乾季には道路になるとの説明を受けた。ワニを飼育し革製品を販売する船で休憩した後、港へ戻った。

昼食後はオールドマーケットで買い物を楽しみ、長距離バスに乗り換えてプノンペンへ移動した。車窓にはカンボジア伝統の高床式住居が続き、途中の休憩所では古いドライブインから近代的な施設まで、経済成長の一端を感じさせる光景が見られた。

プノンペンには予定より30分以上遅れて到着したため、そのまま交歓会会場のレストランへ向かった。カンボジア側からは5名が参加し、計14名での交歓会となった。挨拶、乾杯に続き、プレゼント交換を

行い、和やかな雰囲気で会食が進んだ。カンボジア側は若手が多く、長期駐在者は少ないとこだ。今回参加した 2 名は翌年 3 月までに離任予定とのことであった。話題は多岐にわたり、21 時 30 分を回る頃には名残惜しい雰囲気の中、カンボジア支部が特注で用意してくれた TUFS 校章入りクロマーを手に記念撮影を行い、お開きとなった。



交歓会集合写真

佐伯カンボジア支部長（前列右から 3 人目）

高村（前列右から 2 人目）



支部から頂戴した TUFS 校章入り特製「クロマー」

**12月8日（月）

プノンペン観光、

プノンペン → ハノイ → 成田

プノンペン市内観光では王宮と国立博物館を訪れた。王宮は一部撮影禁止の建物もあったが、イベントのない日は広い範囲が公開されている。国立博物館にはアンコール遺跡から出土した美術品が多数展示されていた。

昼食後は、ポル・ポト政権時代の拷問施設であったトゥル・スレン博物館 (S-21) を訪れ、続いて映画『キリング・フィールド』の舞台となったチュンエクの元処刑場を見学した。自国の痛ましい歴史を後世に伝えるため、施設として保存し続ける姿勢には深い敬意を覚えた。旅の最後が重いテーマの施設訪問となつたことで、今回の旅はより深い意味を持つものとなつた。

空港へ向かう途中で現地合流のメンバーと別れ、プノンペン国際空港へ向かった。同空港は数か月前に開港したばかりで、中国の援助により建設されたとのことである。広大で新しい空港であったが、案内表示は必ずしも分かりやすいとは言えず、利用者に優しい設計とは感じられなかった。

ハノイ空港では往路ほどの混雑はなく保安検査を通過できたが、交歓会費用の精算に手間取り、東京行きの搭乗は急ぎ足となつた。



トゥル・スレン博物館



チュンエク(元処刑場) 慰靈塔



プノンペン空港集合写真
現地ガイドさんと日本発着組 8名



今年開業したばかりのプノンペン空港

**12月9日（火）

成田着

フライトは順調で、無事に成田へ到着した。そのまま解散し、各自帰路についた。参加者の皆様に支えられ、会長として初めて実施した旅を事故なく終えることができた。参加者各位ならびにプノンペン支部の皆様に深く感謝申し上げる。